

大宮売神社の資料調査と展示

京都府立大学文学部考古学研究室・中世史研究室

菱田哲郎・横内裕人・向井佑介・三輪真嗣

板垣優河・中村彰伸・速水佑佳・山口魁人

1. 大宮売神社の概要と展示リニューアルの経緯

大宮売神社（図1）は、京丹後市大宮町周^{すき}積に所在し、丹後国二宮としてふるくより著名な神社である。記録のうえでは、貞観元年（859）の神階授与の記事が『日本三代実録』に現れるほか、『延喜式神名帳』（927）には「大宮売神社二座名神大」と記されている。徳治2年（1307）の紀年をもつ石燈籠があるほか、「周積宮 承安四年」（1174）と記された碁も伝わっており、この地における長い歴史を垣間見ることができる。

その境内や周辺からは弥生時代の土器や古墳時代の祭祀遺物が出土しており、もともと弥生時代の集落であった場所が、やがて古墳時代に信仰の場となり、さらに神社として整備されていった歴史がうかがえる。また、神社境内から出土した遺物のほかに、旧大宮町を中心とした地域で発見された縄文時代の磨製石斧、弥生時代の土器、古墳時代の須恵器・土師器・鉄器、中世の経筒などが社務所に収蔵されており、戦前から戦中にかけて、神社が地域の文化財を保管する博物館のような機能を担っていたことがわかる。

大宮売神社では、以前から社務所内に展示ケースを設置し、神社のなりたちをしめす史資料や周辺地域の文化財を展示してきた。今回、市制10周年の記念事業として、10月4日（土）と5日（日）に、本願寺・円頓寺・宗雲寺・網野神社・大宮売神社・慶徳院において、文化財の特別公開を実施することになった。特別公開にあたり、文学部歴史学科では、京丹後市教育委員会と連携し、平成26年度地域貢献型特別研究「京丹後市内における学校・公民館・寺社などの地域史資料の調査・整理・保存に関する研究」（代表：小林啓治）の一環として、大宮売神社の展示をリニューアルし、また特別公開当日（10月5日）には展示にたずさわった学生が展示解説をおこなった（図8・9）。



図1 大宮売神社の拝殿と本殿

神社が所蔵する中世の扁額や大般若経、江戸時代後期の日記や和歌を記した短冊などは歴史学科教員の横内裕人と中世史を専攻する大学院生・学生が調査にあたり、神社境内と周辺の遺跡から出土した考古資料は、菱田哲郎と向井佑介の指導のもと考古学を専攻する学生たちが整理した（図6）。（向井）

2. 境内出土の祭祀遺物とその時期

明治44年(1910)に二の鳥居が建立されたおり、多く遺物が出土し(周枳区2002)、その後には黒板勝美が来社し、古代祭祀遺跡として取り上げられるようになった。大正11年(1922)には、京都府の史蹟調査の一環として、梅原末治によって境内の鳥居と拝殿の間で試掘調査が実施され、やはり祭祀遺物の出土をみている。戦後には神社の周辺の調査も実施されており、弥生時代の土器や古墳時代の祭祀遺物、奈良～平安時代、中世の遺物が出土している(橋本2010)。

梅原末治の報告(梅原1923)以降、当遺跡の祭祀関係の遺物は繰り返し報告されている。とくに玉類や手づくね土器などの重要な資料が京都国立博物館に寄託され、その資料の図化もおこなわれている(吉村1995)。一方、神社にも多くの資料が残されており、梅原報告に未記載のものも多い。今回は、展示の準備ということもあり、出土情報などの確認と、最小限の整理をおこない、本格的な整理は後日に期すことにした。

祭祀の時期については、これまで報告された須恵器の年代から5世紀後葉から6世紀を中心に考えられてきた(図5)。今回の整理では布留式新段階の甕(図4)もあることがわかり、5世紀初めまで祭祀の開始が遡る可能性も考えられる。一方、6世紀後半以降の資料はほとんどないので、祭祀の時期を5世紀前半～6世紀後半とすることが妥当であると判断する。玉類や剣形などの模造品もこの時期に収まると推測する。

また、今回の展示に合わせて、京都国立博物館保管の資料を調査した。同館の宮川禎一氏のご協力のもと、京丹後市教育委員会の新谷勝行氏とともに、大宮売神社出土資料について写真撮影と計測をおこなった。玉類はおおむね梅原報告に掲載されているが、それ以外のものもあり、また手づくね土器は66点を数え、府内でも屈指の量を誇ることを改めて確認した。神社に残された手づくね土器もそれに匹敵する量があり、総数では100点を超えることが予測される。なお、京都国立博物館保管の手づくね土器については、法量について計測をおこなったので、参考までにその結果を掲載しておく(図3)。大半が高さ5cm以下の小ぶりのものでミニチュア土器と称すべきものであるが、神社の資料も含め、それよりもかなり大きな資料もあり、祭祀土器の定義についても検討を要すると思う。今後は、神社所蔵の祭祀遺物についてさらに調査をおこない、資料化していくことが急務であると痛感している。

上述したように、神社に残された資料により、年代等の再検討をおこなうことが可能になり、古墳時代祭祀を検討するための資料としての重要性も決して減じてはいない。このように、地域の中で、貴重な資料が大切に保管されてきたことの背景として、歴代宮司の博識や関心にもよるところが大きいですが、地域における資料の保存を志向した黒板勝美の考えの影響も十分に考えられる。氏は大宮売神社の古代祭祀遺跡を詠んだ歌を残すなど、この地への関心も大きかったことがうかがえる。地域と文化財との関係を考えるうえでの重要な資料としても、この大宮売神社所蔵の資料を位置づける必要がある。(菱田)



図2 京都国立博物館保管の資料

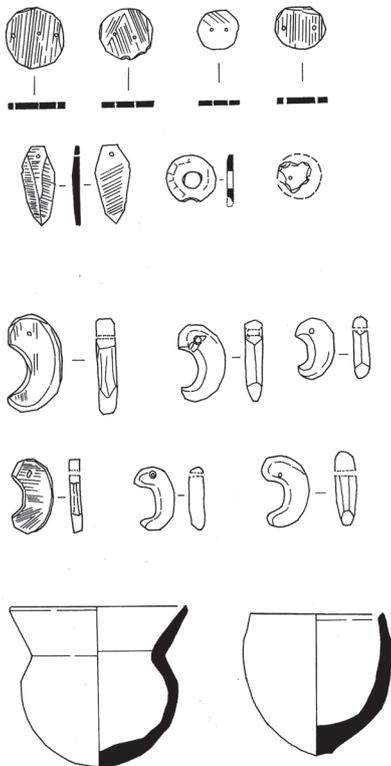


図5 吉村正親氏によって報告された大宮売神社出土遺物

大宮売神社出土手づくね土器法量分布図

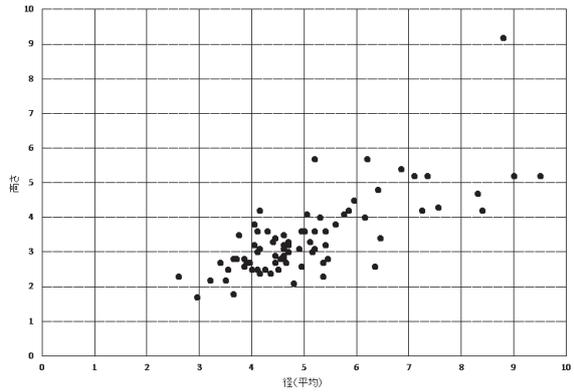


図3 大宮売神社遺跡の手づくね土器法量分布
(単位 cm、新谷勝行氏作成)

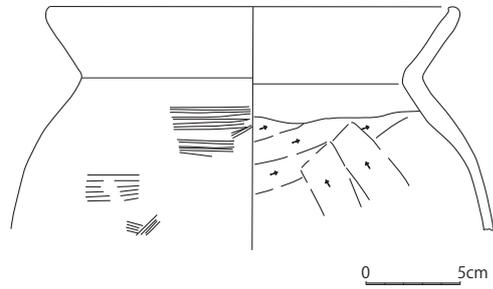
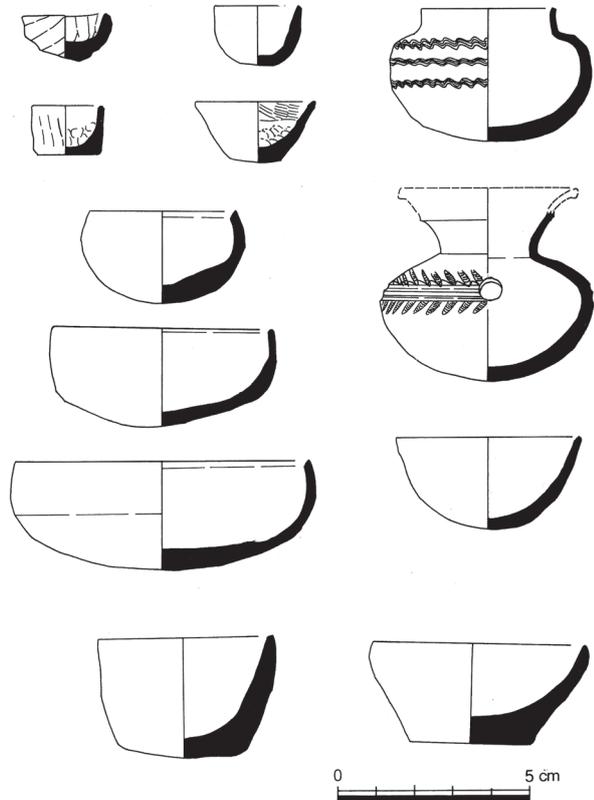


図4 大宮売神社遺跡の布留式土器甕



3. 大宮売神社所蔵の書跡・古文書

(1) 概要

大宮売神社の文献資料は、神主島谷家が伝えた近世を中心とする①伝来史料群と、近代以降に歴代当主が集めた②収集史料からなる。以下、代表的なものを取り上げ解説する。(概要は後掲の表を参照されたい。)

①伝来史料を特徴付けるのは、江戸時代後期に当家の養子となった柳原資前の関連史料である。資前自身の日記や和歌短冊(図7)などが伝わっている(後述)。

古文書は、近世文書・記録が数点残る。当社の宗教活動の一端を伝えるものに、「享保五年(1720)九月七日神道裁許状」がある。神祇管領長上吉田兼敬^{かねゆき}(1652～1731)が、当社「巫女相模」に恒例神事神楽での「舞衣」着用を認めた免許状である。以下、翻刻を記す。

「丹後國中郡周枳村二宮大明神之
巫女相模恒例之神事神楽等
勤仕之時可着舞衣者
神道裁許之状如件
享保五^{庚子}年九月七日
神祇管領長上従二位卜部朝臣兼敬(朱方印)」

②収集史料の中には、先代当主が集めたという「伝藤原俊成和歌色紙」や「林子平関係絵図」等がある。また当社への伝来時期は不明であるが、東大寺八幡経は、鎌倉時代の装飾経として貴重である(後述)。

そのほか、当社には鎌倉時代に遡ると推定される扁額1面が伝わっている(図8の右端)。額縁を象った二重の枠線の中に、「正式位大宮賣大明神／従一位若宮賣大明神」と二柱の神名を隷書で浮き彫りに書している。字の上に銅板を打ち付けた鋳痕が残る。所々に漆痕・布貼痕があり、当初は黒漆塗であったと推測される。杉の一枚板を用いた大型の扁額で、丹後国二宮にふさわしい優品である。
(横内)



図6 資料調査のようす(平成26年7月27日)

(2) 柳原資前日記

江戸時代の公家柳原資前の日記6冊である。資前は『続史愚抄』を編纂した柳原紀光の二男で、大宮売神社に養子に入った。この6冊の日記は若干の空白期間があるものの、享和3年(1803)正月から文化2年(1805)3月までの出来事が記されている。『系図纂要』によると、資前は文化2年の8月に位記を返上していることから、この日記には資前が大宮売神社に来る直前の京都での出来事が記されていることがわかる。日記には資前の寺社参詣や公家との交流など京都での生活が事細かに書かれており、当時の貴族子弟の日常生活や京都の風俗を知る上で、大変興味深い史料である。なお、当社には、資前や父紀光、同時代の公家広橋伊光らの詠んだ和歌短冊などが伝来するが、資前が持参したものであろう。

(3) 大宮売神社所蔵大般若経

大宮売神社所蔵の大般若経(外題「大般若波羅蜜多経第二百二十六」)は、東大寺鎮守八幡宮(現手向山八幡宮)に奉納された、いわゆる東大寺八幡経のうちの一巻である。八幡経は鎌倉時代前期、尼成阿弥陀仏の発願・勧進によって書写・奉納されたもので、奥書に東大寺僧盛真が校合したことが記されている。本紙冒頭部分に「東大寺／八幡宮」の墨印がある。料紙は黄檗染で、界線は朱を用いている。表紙は紺地に金銀の切箔散で装飾され、銀で引かれた二重匡郭内には金字で外題が記されている。表紙見返しも銀箔散が施され、装飾面での美しさも目を引く。墨書の梵字一七文字が記された軸木は作成当初のもので、撥型金軸(下欠)が取り付けられている。紐も当初のもので、全体として作成当初の姿を今に留めている。(三輪)



図7 和歌短冊の展示(リニューアル後)



図8 リニューアルした展示ケース



図9 展示解説のようす(平成26年10月5日)



4. 展示解説プロジェクトについて

市制 10 周年記念の文化財特別公開の一環として、10 月 5 日（日）に学生による展示解説を実施した。展示の公開は 10 時から開始した。展示解説の第 1 回目は 11 時を予定していたが、10 時 30 分頃にはすでに十数名が集まったため解説を早め、担当の学生がそれぞれ 10 分程度で担当の資料を解説した。その後も 1 時間に 1 回程度のペースで適宜解説をおこなった。15 時頃からにわかに見学者数が増加し、急遽 16 時開始の展示解説を 2 回にわけておこなった。展示の公開は 17 時をもって終了した。

文献史料の解説は三輪が担当し、鎌倉時代の扁額、大般若経、江戸時代の日記・和歌史料について説明した（図 9 左）。考古資料の解説は、神社境内からの出土品は速水が、神社周辺地域からの出土品のうち、縄文時代の磨製石斧、弥生土器、そして中世の経筒およびその土師製外容器は板垣が担当し、古墳時代の須恵器およびニシガイ古墳の鉄剣などは中村が担当した。社務所外の境内の建造物・文化財については山口が解説を担当した。建造物は、現・旧本殿や絵馬舎・摂末社の形式に加え、宮津藩との関係や昭和 2 年（1927）の北丹後地震の影響など建造・移築の歴史的背景について説明した。また国指定重要文化財の石灯籠について、形式や地域性について解説を加えた（図 9 右）。

当日は台風が接近していたため見学者は少なくなるであろうことが危惧されたが、予想に反して約 80 名の方にご来訪いただくこととなった。会場では展示の解説に熱心に耳を傾け、なかには解説後に鋭い質問をしてこられた方もおり、答えに窮することもあった。境内出土のミニチュア土器の使い方や須恵器と土師器の違い、神社周辺から出土した縄文時代の磨製石斧や伝ニシガイ古墳群の鉄剣などに興味をもたれた方が多いように見受けられた。展示に対する見学者の熱心な姿勢に私たちは驚くとともにやりがいを感じた。

来館者にアンケートをお願いし、38 名の方から回答をもらった。アンケートの内容は年齢、どこから来たか、展示を知ったきっかけ、そして意見・感想の 4 つであり後者 2 つは自由記述方式である。年齢層は 60 代前後が最も多く、全体の約 9 割を占めているということがわかった。そのうち、旧大宮町内からの来客が 10 人、その他京丹後市内からの来客が 24 人であり、地元の歴史に関心をもつ地域の住民が多いということがうかがえる。チラシ、新聞などから情報を得て参加した人や、市制 10 周年記念の文化財特別公開の一環として見学に参加されていた人もいたようだった。自由感想を見るに展示についておおむね好評であり、今回の展示によって地域の歴史により興味をもつようになったという方もいらっした。またこのような催しを開いてほしいという意見も複数いただいた。

今回の展示解説は自分たちが神社の収蔵品を調査し、展示構成の工夫やキャプション作りなども含めて一から準備を行ったため、質問にもある程度自信をもって答えることができた。また、逆に地元の見学者から近年の神社の様子や遺物出土地点の小字名などについて、こちら側が参考になるようなご教示もいただくことができ、相互に有意義な展示会となったと思う。

（三輪・板垣・中村・速水・山口）

表 大宮売神社所蔵史料目録

番号	題 (収集品は※)	員数	形状	紙数	縦 (cm)	横 (cm)	備考
古文書							
1	柳原資明日記 (全6冊)						
①	享和三年春記	1冊	横帳	38紙	11.5	17	(表紙墨書)「資前(右下)／享和三〈癸／亥〉年／春〈正月閏正月／二月三月〉」(外題)「日記 東」
②	享和三年夏記	1冊	横帳	34紙	11.8	17.2	(表紙墨書)「資前(右下)／享和三〈癸／亥〉年／夏〈四月五月／六月〉」(外題)「日記 西」
③	享和三年秋記	1冊	袋綴装	36紙	17.8	14.5	(表紙墨書)「資前(右下)／享和三〈癸／亥〉年／秋〈七月八月／九月〉」(外題)「日記 南」
④	文化元年自三月至七月記	1冊	横帳	46紙	11.5	16.1	(表紙墨書)「文化元〈甲／子〉歳〈三月四月／五月六月／七月〉」(見返墨書)「從五位下藤原資前」(外題)「日記 二」
⑤	文化元年自八月至十二月記	1冊	横帳	61紙	11.8	16.8	(表紙墨書)「文化元〈甲／子〉歳〈八月九月／十月十一月／十二月〉」(見返墨書)「從五位下藤原資前」(外題)「日記」
⑥	文化二年春記	1冊	横帳	39紙	11.7	16.8	(表紙墨書)「文化二〈乙／丑〉歳／春〈正月二月／三月〉」(見返墨書)「從五位下藤原資前／廿七歳」(外題)「日記 一」
2	享保五年九月七日神道裁許状	1通	縦紙	1紙	44.2	57.8	
3	文久元年御年貢通	1通	横帳	2紙	123	34.1	包紙一枚、ウワ書「万延元年庄屋茂兵衛／申御年貢通／組頭三右衛門殿」
4	慶応四年曆	1冊	仮綴	14紙	16.8	11.5	
5	丹後旧事記実録(外題)	1冊	袋綴	43紙	25.2	16.5	(表紙墨書)「周枳吉岡平大夫(左下)」
6	御代々宮津城主御料御役所附(外題)	1冊	袋綴	64紙	25	17	
7	天保十三年御殿様御参詣之事	1通	折紙	1紙	12.3	34.7	
8	大織冠御付属伊日曆御書	1通	縦紙	1紙	32.5	43	
9	大宮売命像(版本)	1鋪	縦紙	1紙	57	25.6	
書跡							
1	柳原紀光和歌短冊	一枚	短冊	1紙	36	5.8	「書もとめに忠種を／あつまのかたに／つかはすとて／つかれうき名残の露をかへりこむ／秋にうれしくむすひかへまし紀光」
2	柳原資前和歌短冊	1枚	短冊	1紙	36.4	5.8	「花のかのさそいもこすハ雲とみて／やミなむ物をかつらきの山 資前」
3	広橋伊光和歌	1枚	短冊	1紙	17.8	15.8	「老ぬれハおなし／ことことせられけれ／天ハ千世万世／きみはちよませ」
4	※伝藤原俊成筆和歌色紙	1枚	色紙	1紙	17.8	16.5	「皇太后宮大夫俊成／雪ふれハみねの／真榊うつもれて／つきに見かける／天のかく山」
5	伝清岡長時和歌色紙	1枚	色紙	1紙	18.5	17	「霞たち木めも／春の雪ふれハ／花なき里も／はなそちりける」
6	伝万里小路淳房筆和歌色紙	1枚	色紙	1紙	18.5	16.8	「松しまや／塩くむあまの／秋の袖／月はものおもふ／ならひのそかす」
7	某筆和歌色紙	1枚	色紙	1紙	20	18	「和哥のうらに／しほミちくれハ／かたをなミ／芦へをさして／たつ嶋わたる」(山部赤人)

番号	題 (収集品は※)	員数	形状	紙数	縦 (cm)	横 (cm)	備考
8	某筆和歌色紙	1枚	色紙	1紙	20.7	17.8	「かせふけは／ほかになるミの／かたおもひ／おもはぬなみに／なくちと鳥かな」
9	某筆和歌色紙	1枚	色紙	1紙	18	17	「いく里か月の／ひかりもにほふ覧／むめさく山の／草の春かせ」
10	某筆和歌色紙	1枚	色紙	1紙	19.1	16.8	「松のはな／十かへりさける／君か代に／なにをあらそふ／鶴のよは○○」
11	有栖川韶仁親王和歌	1枚	豎紙	1紙	36.5	51.6	
経巻							
	※大般若波羅蜜多經第二百二十六(外題)	1巻	卷子	16紙	24.6	844.6	紺紙原表紙(縦二四・六、横一九・一、青、金箔砂子散・銀霞)、(外題)「大般若波羅蜜多經第二百二十六」(銀二重匡郭)、見返(銀箔散)界線(縦一九・九、界幅二・〇、朱界)、軸あり(素木・撥型・金銅、軸端下欠、墨書梵字十七字あり)、印(墨・二重長方)「東大寺／八幡宮」あり。(奥書)「為二雜兼法界衆生平等利益／一校了 盛眞」
近代史料							
1	※〈万民用文〉普通作文必携巻上	1冊	和本	128紙	18	12.8	平成十六年松村英一郎氏寄贈
2	尋常小学校修身書二学年巻二	1冊	和本	16紙	22.8	15.8	銀二重匡郭、(版記)「京都府教育会〈中竹野／熊野〉三郡部会／〈発行兼／印刷者〉〈京都市三條通寺町東拾三番戸〉福井源次郎(印)」、鳥谷杉枝氏所用。
3	尋常小学校修身書二学年巻二	1通	豎紙(モト袋綴)	1紙	24	33.1	
4	昭和二十八年御日待講參集簿	1冊	仮綴	15紙	24.7	17	「昭和廿八年十月廿七日／御日待講參集簿／二の宮社務所」、昭和二十八・二十九年分
地図							
1	※林子平関係地図(全4枚)						
①	「大日本以下国々嶋連合之形勢図」	1枚		4紙継	51.3	73.3	裏打。裏に朱方印「嶋谷／□□」あり。
②	「蝦夷国図／仙台林子平図」	1枚		6紙継	51	92.6	裏打。裏に朱方印「嶋谷／□□」あり。
③	「琉球三省〈?〉三十六嶋之図／仙台林子平」	1枚		5紙継	51	74.6	裏打。裏に朱方印「嶋谷／□□」あり。「台湾三県之図」あり。二十三度から二十六度までの緯度の記入あり。
④	「朝鮮八道之図」	1枚		4紙継	51.5	74.3	裏打。裏に朱方印「嶋谷／□□」あり。「仙台 林子平図／天明五年秋 東都 須原屋市兵衛梓《日本橋北室町三丁目》」、三十五度から四十三度までの緯度の記入あり。東西南北にハンゲルが記される。

【参考文献】

周枳区『周枳郷土誌』、2002年。

吉村正親「丹後大宮売神社遺跡の性格について」『大宰府陶磁器研究』、1995年。

橋本勝行「大宮売神社遺跡」『京丹後市の考古資料』、2010年。

梅原末治「大宮売神社」『京都府史蹟勝地調査会報告』5冊、1923年。